
スルバラン作ラス・クエバスのカルトゥジア会三部作
—聖具室装飾の機能と意義をめぐって—

17世紀スペインの画家フランシスコ・デ・スルバラン（1598-1664年）は、セビーリャ、ラス・クエバスのカルトゥジア会の聖具室装飾のために三点の絵画《食堂の聖ウーゴ》、《ラス・クエバスの聖母》、《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》を手掛けた。これらは、カルトゥジア会の主要な美德たる「禁欲」、「聖母の庇護（聖母への崇敬）」、「沈黙」を表す三部作として、カルトゥジア会美術においても傑出した作品群である。

制作年を伝える同時代史料が存在しないため、従来の同三部作研究の主たる関心は制作年代の特定にあった。唯一の史料である18世紀作成の修道院年代記（Protocolo）は、スルバランが1655年に制作した事実を記しているものの、同年代記は、破損した修道院の文書史料の復元、集成であるため、その信憑性には問題があるとされた。とはいえ、デレンダなど近年の研究者達は、後期作品との様式的な一致から、年代記の伝える制作年を肯定的に受け容れようとしている。本発表では初めに、1650年前後の他作例との比較を基に、この時期にラス・クエバス三部作を位置付けることは妥当であるか確認する。それを踏まえて、これまで制作年代議論の傍ら、看過されてきた重要な二つの問題に光を当てたい。

一つは、ラス・クエバス三部作が聖具室に飾られた意義は何かという機能の問題である。1980年代末、バティクルの現地調査による聖具室壁面の額の発見は、スルバランの絵画が、三部作として聖具室に飾られていた事実を実証した。また、三部作がカルトゥジア会の主要な美德の表象であることはすでに多くの先行研究で指摘されてきた。しかし、聖具室という場における三部作の機能に関しては、ほとんど追及されることがなかった。17世紀には、他の多くの修道院や聖堂でも、絵画などによる壮麗な聖具室装飾が行われており、それらを鑑みることで、本聖具室における三部作の役割や意味を明らかにしたい。

これを踏まえたうえで、もう一つの問題、ラス・クエバスが当時どのような状況に置かれていたのかという視座から聖具室装飾の意図を考察する。スルバランに絵画制作を依頼したと想定されるのは、ブラス・ドミンゲス修道院長であり、年代記は、《食卓の聖ウーゴ》に描かれた聖ブルーノは見たての彼の肖像であることを伝えている。この点に着目し、さらに画中に描きこまれたラス・クエバスのカルトゥジア会創設者ゴンサロ・デ・メナの紋章なども考慮すれば、《食卓の聖ウーゴ》が持つ肖像画的な側面が浮かぶ。これは、創設当初より、多くの有力者たちの寄付を得、17世紀には、豊かな資産を有するスペイン屈指の大修道院に成長したラス・クエバスの自負心の表明ではないだろうか。17世紀、スペインのカルトゥジア会におけるラス・クエバスの自意識をうかがわせるのである。

これらの諸問題を総括し、聖具室装飾として制作されたラス・クエバス三部作の意義を追及したい。